

会期を通じた開催

愛知県歯科医師会特別シンポジウム | オンデマンド動画

オーラルフレイル・口腔機能低下症と認知症の関連について ～厚生労働省老人保健健康増進等事業2年目の取り組みから～

座長:富田 健嗣(愛知県歯科医師会地域保健部 (高齢福祉・歯科医療センター))

[SY1-OP] <あいさつ>

[SY1-1] 地域住民を対象とした口腔機能検診の効果および認知機能との関連

○内堀 典保¹ (1. 一般社団法人愛知県歯科医師会会長)

[SY1-2] オーラルフレイルと認知症

○遠藤 英俊¹ (1. 聖路加国際大学臨床教授)

[SY1-CL] <総括>

愛知県歯科医師会特別シンポジウム | オンデマンド動画

オーラルフレイル・口腔機能低下症と認知症の関連について ～厚生労働省 老人保健健康増進等事業2年目の取り組みから～

座長: 富田 健嗣(愛知県歯科医師会地域保健部(高齢福祉・歯科医療センター))

【略歴】

1994年:

東北大学歯学部卒業

1998年:

東北大学大学院歯学研究科修了(歯学博士取得)

1998年:

東北大学歯学部附属病院医員

1999年:

名古屋市東区にて勤務

2001年:

名古屋市東区にて開業

2005年:

名古屋市東区歯科医師会理事

2007年:

愛知県歯科医師会地域保健部部員

2016年:

愛知学院大学歯学部在宅歯科医療学寄附講座非常勤講師

2017年:

愛知県歯科医師会地域保健部(高齢福祉・歯科医療センター)次長

現在に至る

[SY1-OP] <あいさつ>

[SY1-1] 地域住民を対象とした口腔機能検診の効果および認知機能との関連

○内堀 典保¹ (1. 一般社団法人愛知県歯科医師会会長)

[SY1-2] オーラルフレイルと認知症

○遠藤 英俊¹ (1. 聖路加国際大学臨床教授)

[SY1-CL] <総括>

[SY1-OP] <あいさつ>

[SY1-1] 地域住民を対象とした口腔機能検診の効果および認知機能との関連

○内堀 典保¹ (1. 一般社団法人愛知県歯科医師会会長)

【略歴】

1978年：

愛知学院大学歯学部卒

1982年：

藤田学園保健衛生大学医学部大学院修了（医学博士号授与）

1982年：

名古屋市中村区にて開業

歯科医師会関係

1991年4月：

名古屋市中村区歯科医師会理事

2003年4月：

愛知県歯科医師会理事

2007年4月：

愛知県歯科医師会代議員

2011年4月：

愛知県歯科医師会副会長

2011年4月：

日本歯科医師会代議員（現任）

2017年6月：

愛知県歯科医師会会長（現任）

厚生労働省関係

1997年10月：

医政局医療課ワーキンググループ委員

審査員関係

1997年6月：

愛知県国民健康保険団体連合会 審査員

1999年6月：

愛知県社会保険診療報酬支払基金 審査員

2009年6月：

愛知県社会保険診療報酬支払基金 審査員

賞罰

2012年3月：

日本公衆衛生協会会長表彰

2012年10月：

日本歯科医師会会長表彰

愛知県歯科医師会では2018（平成31）年および2019（令和元）年に、愛知県知多郡東浦町において、要介護者を除く65歳以上の町民を対象とし、口腔機能および筋力、認知機能等の調査を行った。同時に、口腔機能の維持・向上の啓発効果をねらい、口腔機能低下症の説明用リーフレット配布や個人結果の通知を行った。

2018年の調査参加者の口腔機能低下症該当者率は63.0%であったが、2019年では48.6%に低下していた。7つの口腔機能検査項目のそれぞれをみると、舌口唇運動機能低下者の割合は79.1%から54.5%に減少、咀嚼機能低下者割合は9.8%から3.2%に減少、嚥下機能は10.4%から6.6%へ減少し、改善がみられた。それ以外の口腔機能では大きな差はみられなかった。本事業による啓発効果により、町民の口腔機能に対する意識が高まったと考えられる。

さらに2年連続で調査を受診した者と単年のみの検査受診者全体を比較すると、2年連続で調査を受診した者の2019年の口腔機能低下者割合は41.3%であり、それ以外の者の52.4%と比べると、明らかに口腔機能低下者割合は少なかった。この差は、本事業へ参加したことによる参加者自身の口腔機能状態の把握や配布資料による知識向上等によるものと推察される。

認知機能の検査は改訂長谷川式簡易知能評価スケールを用いた。平均27.8点で、認知症が疑われる者の割合は約2.5%であった。各個人の口腔機能低下がみられた検査結果の数を口腔機能低下数とし、改訂長谷川式簡易知能評価スケールの得点と口腔機能低下数との相関をみると、得点が低いほど口腔機能低下数が増加した（ $r=-0.24$, p （COI開示：なし））

愛知県歯科医師会倫理審査委員会承認番号 愛歯発第302号

[SY1-2] オーラルフレイルと認知症

○遠藤 英俊¹（1. 聖路加国際大学臨床教授）

【略歴】

1982年：

滋賀医科大学卒

1987年：

名古屋大学大学院修了 医学博士取得

1990年：

米国国立老化研究所客員研究員

1992年：

中津川市民病院内科部長

1993年：

国立湊病院内科医長

1993年：

国立療養所中部病院内科医長

2004年：

国立長寿医療センター包括診療部長

2010年：

国立研究開発法人国立長寿医療研究センター老年内科部長

2014年：

国立長寿医療研究センター長寿医療研修センター長

フレイルは老化のサインであり、症候群である。早期に発見し介入することで病気を予防することができる。フレイルと認知症の関連も指摘されており、オーラルフレイルがその起点となる可能性もある。特に認知症の観点からオーラルフレイルとの関連について分担報告する。

2020年より全国で15項目からなるフレイル検診が開始される。具体的内容としては健康状態、心の健康状態、食習慣、口腔機能、体重変化、運動・転倒、認知機能、喫煙、社会参加、ソーシャルサポートについての問診票が作成されている。

すなわち今後ますます地域行政によるフレイルへの取り組みが強化される。歯科領域においても早期発見、早期対応の重要性が増すであろう。すなわち地域での歯科領域における定期的検診に加えて、同時に運動と栄養における個人と集団への支援が必要である。

一方認知症は予防の取り組みが強化されようとしており、本シンポジウムでは最近の認知症施策推進大綱における共生と予防について説明する。予防については特にコグニティブフレイルが強調されており、早期診断の重要性が強調されている。特にアルツハイマー病においては、アミロイド PETや血液検査を用いて、発病前診断が重要とされており、バイオジェン製薬のアジュカネマブが2020年に FDAへ申請予定となっており治療薬として期待されているが、まだ未確定の部分が多い。そこで日常生活における予防が重要であり、内容としては生活習慣病の予防を始め、運動や食事による認知症予防、禁煙や社会的交流の重要性、脳トレが推奨されている。他にもうつや難聴への対応の重要性が指摘され、70歳代の認知症発症を1年程度遅らせることが目標となっている。

すなわち共生については地域づくりと人づくりが重要であり、インフォーマルケアの重要性が指摘されている。最後に予防の取り組みが強化される中で、オーラルフレイルの重要性と認知症との関連について報告する。今後の認知症に対する歯科医師に期待される役割について議論したい。
COI：特に発表に関連して公表すべき事由はない

[SY1-CL] <総括>